

【表紙】

作品タイトル

「今日は晴天なり」

(ほんじつはせいてんなり)

鎌田勝浩 作

(かまだかつひろ)

年齢42歳

原稿枚数 27枚：200字詰め原稿用紙換算78枚＝20文字×780行  
(本文のみ)

電子メール kamada@ki.l.co.jp

【あらすじ】

少し好奇心が強いが普通の高校生仲間賢一は、ある日、パーソナルロボット、パロのアリスのために、アリスと共に電気街に記憶デバイスを買いに出かける。

大型店では資金不足で買えなかった賢一は、掘り出し物がよくある、小規模集合店舗のあるビルへと向かい、地下の怪しい店を見つける。無事中古の記憶デバイスを手に入れ、同時に、資料として記憶媒体も手に入れる。

自宅に戻った賢一は、無事記憶デバイスを取り付け、アリスを再起動させる。すると、アリスはいままでとは全く違う、人間的な言動をするようになる。同時に貰った記憶媒体の資料を眺めてみると、中に街の地図が入っていた。普通の地図と比べると、街の外の記述がなく、しかも境界部に一部不一致が見られた。面白そうだからと、翌日、そこに探検に行く事にする賢一。

翌日、街外れの廃工場を探検する賢一とアリス。人気のない建物内を探検するが、未だに電源の生きている地下の謎の通路と、その奥に謎のドアを見つける。賢一が手をかざすと、扉は開いた。

扉の外には、遙か彼方まで砂礫砂漠が続いていた。気がつくや、鞍馬と名乗る、烏天狗に似た男がおり、『あの方』に会わせるために迎えに来たと言いつ。

『あの方』、葛葉と名乗る和服婦人から、驚愕の真実を聞く賢一。ここは地球から56億7千万光年離れたネヴァンと言う惑星であり、賢一は、10年前に地球が小惑星群に襲われる直前に連れてこられ、地球の街を模したドーム内で育てられたのだという。

あまりの事に信じられず飛び出してしまふ賢一。元の街に戻ってみると、街の人たちは皆、ロボットだった。いつか地球に戻ることを誓う、賢一だった。

【作品のキャッチコピー】

「大人になる日。時としてそれは、突然にやって来る」

【主人公の人物像】

主人公の仲間賢一（15）は、身長170cm、体重55kgほどの、少し好奇心が強いが、ごく普通の高校1年生。一人称は「僕」。

今で言う「携帯電話」のような位置づけの、人型等身大パーソナルロボット、略してパロの、アリスという名の女性形パロを持っている。今の日本の、地方中堅都市と同じような街に住み、何気ない日常を過ごしていた。

賢一は、自分は全く平凡な高校生だと思っていたが、実は特別な境遇であった。人類の壊滅を逃れて遥か遠くの惑星に連れてこられ、それとは知らされずに元の生活環境に模した、ドームと呼ばれる人工の街で暮らしていたのだった。

タイトル『本日は晴天なり』—シナリオ

葛葉	鞍馬	堀田	大型	婦人	賢一	賢一	アリス	仲間	登場	脚本	タイトル
(くずは…32歳相当)	(くらま…35歳相当)	田商会店主(翁…70歳相当)	店男性店員(30)	(38)	一の父(回想…39)	一の母(40)	(ロボット…17歳相当)	賢一(なかまけんいち…12、15)	人物	鎌田勝浩	「本日は晴天なり」

○ 賢一の自宅・玄関（昼）

玄関で、賢一が靴を履いて出かけようと  
している。側でアリスも準備している

賢一 「じゃあ母さん、行ってきます」

母（声） 「行ってらっしゃい。遅くならない

うちに帰ってくるのよ」

賢一 「（不機嫌そうに）分かってるよ。さ、ア

リス、行こう」

アリス 「（幾分機械的口調で）はい、けんいち」

扉を開けてアリスと共に外に出る賢一

【タイトル】

○ 賢一の自宅・玄関前（昼）

賢一がアリスとともに、玄関前の道に出  
て歩き出す。（以降、賢一とアリス以外

の人物の姿、特に顔は、巧妙に隠されて

画面上には現れない。出来るだけ自然に）

婦人（声） 「こんにちは、いいお天気ですね」

賢一 「こんにちは、おばさん。じゃあ、行っ

賢一（12）「ありがとうございます、父さん、母さん。

父（声）「賢一、中学進学おめでとう。これ

○ 賢一の自宅・居間（夜・回想）

アリスを受け取る賢一（12）

賢一（N）「この時代、子供から大人まで、ほとんどの人たちが、一人一台、自分専用のロボットを連れ歩いていた。パーソナルロボット、略してパロは、簡単な計算からスケジュール管理などの秘書機能、情報収集や他人との会話などの情報交換端末機能など、様々な機能を持ち、最近では小学生まで持つようになってきた。僕も中学に入學するとき、入学祝いとして買ってもらった。それが、このアリスだ」

普通に入学するとき、入学祝いとして買って

普通着の賢一と、女性形人型等身大のいかに、なロボットのアリスが、至って普通の日本風の町並みの道を歩いていく

賢一（N）「この時代、子供から大人まで、ほとんどの人たちが、一人一台、自分専用のロボットを連れ歩いていた。パーソナルロボット、略してパロは、簡単な計算からスケジュール管理などの秘書機能、情報収集や他人との会話などの情報交換端末機能など、様々な機能を持ち、最近では小学生まで持つようになってきた。僕も中学に入學するとき、入学祝いとして買って

僕、嬉しいよー

○賢一の自宅近くの道（昼・回想から戻る）

賢一、アリスとともに道を歩いている

賢一（N）「こうして買ってもらったパロの

アリスだけど、さすがに3年も経つと最新

モデルとの性能差が無視できなくなってきた

ていたー

歩きながらアリスを眺めて

賢一（M）「とはいえ、結構高価なパロを買

い替えるのは、親も許してくれないし、そ

んなお金もないんだよなー

アリス「ん？けんいち、なんですか？」

賢一「少し気まずそうにーい、いや、なんで

もないよ、アリスー

不思議そうな仕草を見せるアリス

賢一（N）「そんなわけで、比較的安価で、

僕の少ない小遣いでも手が届き、しかも効

果が抜群と言われている、記憶デバイスの

増強をするために、電気街に買い出しに行くところだった」

賢一「いくよ、アリス」

アリス「はい、けんいち」

歩き出す二人

○ 電気街・大型店内（昼）

大型店のカウンター前で、賢一とアリスが、店員と話をしている。ただし、店員や他の客の声は聞こえても、巧妙に姿、特に顔は画面に現れない

男性店員（声）「残念だけど、このモデルだとその予算で買える記憶デバイスははないなあ。最新モデル用なら、買えるんだけど」

賢一「つぶやくように」そんなにするのか：

古いからなあ：

考え込む賢一。その顔を覗き込むアリス

アリス「ん？けんいち、どうした？」

賢一「いや、なんでもない。行こう、アリス」

大型店を出る二人



タイトル『今日は晴天なり』 - シナリオ

							賢		賢										○
							一		一										電
*	と	掘	地	「	壁	*	「	を	が	の	タ	ツ	っ	奥	薄			電	
	あ	田	下	パ	の		ん	見	あ	狭	ー	が	し	行	暗			気	
*	る	商	、	ロ	張	*	？	つ	っ	い	が	り	き	い	店			街	
		会	エ	用	り		な	け	た	通	閉	、	も	内	。			・	
*			ス		紙	*	ん	る	り	路	ま	所	2	。	2			小	
		店	カ	掘			だ	賢	す	を	っ	狭	メ	メ	メ			規	
		主	り			？	一	る	歩	て	し	ー	ー	ー			模		
		「	ー	出			：		ん	き	い	と	ト	ト				集	
			タ	し			な		だ	な	る	並	ル	ル				合	
			降	物			に		よ	は	店	ん	ほ	ほ				店	
			り	の			な		な	、	も	で	ど	ど				舗	
			て	中			に		に	案	ち	い	の	の				内	
			奥	古			：		は	外	ら	る	小	小				1	
				品			な		、	掘	ほ	。	さ	さ				F	
				あ			に		案	り	ら	シ	な	な				(	
				り			に		外	出	ほ	ャ	店	店				昼	
				マ			に		掘	し	ら	ッ	が	が				)	
				ス			に		り	物	ほ	ッ	ぎ	ぎ					
							に		紙		ら	ッ							

賢一「んー、いかにも怪しいなあ。ま、行くだけ行ってみるか」

振り向いて、側にある下りエスカレーターを降りて行く二人

○ 電気街・小規模集合店舗内B1（昼）

さらに薄暗い店内。シャツターを閉じた店舗が結構ある。奥に行くほど暗くなる。そこを歩いて行く賢一ら二人

○ 堀田商会前（昼）

一番奥のどん詰まりにある堀田商会。なぜかシャツターが半分降りているが、確かに堀田商会とある。賢一、周りをきよろきよろ見回しながら

賢一「ここ：だよな。休みかな？」

店名を確認して

賢一「一応、声かけてみるか。（息を吸って）こんにちは。御免下さい。やっていますか？」

暫く応答を待つ賢一

タイトル『今日は晴天なり』ーシナリオ

賢一「誰もいらっしやいませんかー？：いな  
いみたいだな」  
店主（声）「しわがれた声で」はい、なんで  
すかな？」  
賢一「少し驚いて」うわっ、いたんですか。  
すいません、このパロの記憶デバイスが欲  
しいんですが：」  
店主（声）「記憶デバイスか。どれ、どれ」  
さらに薄暗い店の奥に人影がいつの間に  
か現れ、眼鏡と思われる部分が一瞬光る  
店主（声）「随分と古いタイプですな。この  
タイプだと、もう流通在庫しか残っており  
ませんでしょうから、あっても高価でしょ  
うな。中古でよろしいんですかな？それと  
も新品にしますかな？」  
賢一「あれば、中古で」  
店主（声）「中古ですな。ちよっとお待ちく  
ださい」  
人影が消える。しばらくして  
店主（声）「おお、一つだけありました。こ

れでいいですか？」

賢一（N）「運良く、ちょうど手持ちでなんとか買える額だった。取付けを勧められたが、取付け賃までは、持っていなかった」

店主（声）「本当に、こちらで取付けなくてもいいんですな？」

賢一（苦笑して）「はい、結構です。大丈夫です」

店主（声）「では、取付けの手順を書いた、取説のコピーをつけましょう。それと、関連資料を記録した、記憶媒体も」

賢一「はい、ありがとうございます」

店主（声）「せいぜい気をつけることですね」

賢一（N）「こうして、僕はアリスの記憶データベースを手に入れた」

○ 賢一の自宅・自室（夕）

部屋の中央に椅子があり、アリスが座っている。窓際の机には、取説のコピーなどの資料が広げられている。賢一はアリ

タイトル『今日は晴天なり』—シナリオ

了。運動制御プログラムロード開始：終了。

ク：終了。基本プログラムロード開始：終

シシステムチェック：終了。デバイスチェ

OSバージョン10.5。起動します。：

アリス（機械的な声で）パーソナルロボット

再起動を始める

一旦、一切動かなくなるアリス。やがて

らくお待ちください

め、再起動します。再起動終了まで、しば

アリス「はい、けんいち。インスタールのた

賢「えっ、再起動が必要なか：まあ、い

一旦、再起動します。よろしいですか

インスタールします。インスタールのため、

アリス「はい、けんいち。記憶デバイスをイ

スをインストール

賢「よし、大丈夫だ。アリス、記憶デバイ

賢「これで、多分大丈夫なはずだけど

賢「この胸部にある扉を閉じる

タイトル『今日は晴天なり』－シナリオ

賢一 「お前：アリス：だよな？」

アリス 「どうしたの、賢一。そんなびっくりした顔して。可笑しいんだ」

賢一 「（驚いて）え、何？アリス？」

アリス 「あ、賢一だ。：そうか、アリス、再起動したんだね」

賢一 を見つけて

アリス 「（以後、人間的で自然な喋り方で）あれ、ここはどこ？」

アリス 「突然、周りを見回しだすアリス。起動しました」

アリス 「パーソナルロボット、アリス。起動初めて見た」

賢一 「へえーっ、こんな風に起動するのか：起動の様子に興味深く見つめる賢一

移行します：OS起動」

プログラムロード完了。制御をOSに

リケーションプログラムロード開始：終了。

合管理プログラムロード開始：終了。アップ

行動制御プログラムロード開始：終了。総

アリス「何言ってるの？アリスだよ。当たり前前でしょ」

賢一「（N）「いろんな人の、いろんなパロを見てきたけど、こんな風に喋るパロは、見たことがなかった」

賢一「アリス、いったいどうしたんだ？その：喋り方は？」

アリス「え？アリス、変？：うーん：朝、目覚めたような感じ。今まで寝ていたような感じ。：そんな感じかな？」

賢一「アリス？：目覚めた？」

アリス「今は気分すっきり爽やかだよ。わーい、賢一！」

賢一「飛びついて抱きつくアリス落ち着け」

そう言ってるアリスを振りほどきにかかるアリス「えーっ、賢一。冷たいなあ。アリスのこと、クライ？」

アリスを椅子に座らせて

賢一 「嫌いも何も、パーソナルロボット、パ  
ロだろ？ そんなこと、考えたこともない」  
アリス 「（ふくれて）賢一、冷たいんだあ」  
賢一 「冷たいも何も。：しかし、記憶デバイ  
スを増設しただけで、こうも変わるものな  
のか？ パロって」  
アリス 「うーん。よく分からないけど、どう  
も、増設した記憶デバイスに、何か一杯入  
ってたみたいよ。だからこうなったみたい」  
賢一 「何か入ってた？：うーん、やっぱり中  
古は：」  
アリス 「あっ、記憶媒体を見つけ  
机の上の記憶媒体を見つけて  
アリス 「じゃあ、見てみようよ」  
記憶デバイスの資料が入ってるらしいけど」  
賢一 「じゃ、見てみて」  
机の上の切手大の記憶媒体をアリスに渡



アリス「はい」

アリス「胸の扉を開けて、記憶媒体をセ

ットする

アリス「じゃあ、出しますね」

アリスと賢一の目前に、大きな透明スク

リーンが現れ、内容が表示される。

表示を切り替えながら

アリス「うーん。ただの記憶デバイスの資料

関係みたいですね。：あんまり関係ないか

な。あれ？」

賢一「えっ？ どうした、アリス」

アリス「地図を表示して

アリス「どうやら、地図、みたいですね」

賢一「地図？ どの？：あ、この街の地図み

たいだな。：ん？ なんか違うようない」

アリス「この街の地図ですか？ 検索して隣に

出します」

隣に地図が並べて表示される

賢一「何が違うんだろ。：あ、そうか。街

の外がないんだ。ほら」

アリス「あ、そうですね、確かに。市街の部  
分を比較してみます」  
比較した結果の違う部分をもう一つ、上  
部にスクリーンを開いて表示する。市街  
の境に違いがあることが分かる  
アリス「文字の位置やサイズなどを除いた、  
有意な差分を表示しました」  
賢一「ここが違うのか。あれっ、ここに何か  
あったかな？」  
アリス「ここだけ違うみたいですね」  
賢一「うーん。面白そうだから、明日にでも  
ちよつと行って、探検してみるか」  
アリス「わーい、面白そう。行く行く！」  
賢一「んー。やっぱり何か、調子狂うんだよ  
な、アリス」  
○ 街外れの廃工場前（昼）  
人気のない廃工場。周りは人が入れない  
ように鉄板や鉄網で囲われている。入口  
と思われる鉄製のドアの前に立つ賢一と



賢一 「うわっ」

慌てて足を戻す。見下ろすと腐った鉄板

賢一 「近くで見ると、結構錆びてるな」

アリス 「足下に気をつけて」

階段を上って行く

とりわけ錆びている階段の鉄板に足をか

けて、踏み抜きかける賢一。

賢一 「よし、行ってみよう」

アリス 「少し錆がひどい部分があるようだが

ら、気をつけてくださいね」

賢一 「うん、分かった」

○ 街外れの廃工場・建物階段（昼）

賢一、アリスの順で、階段を上って行く。

賢一 「よし、行ってみよう」

アリス 「あの階段を上って、2階の入口から

入れるはずですよ」

賢一 「よし、行ってみよう」

アリス 「あの階段を上って、2階の入口から

に2階へと続く鉄の階段がある

のシャッターは閉じられており、外側脇

間口10m、高さ8mほどの建物。1階

賢一 「開いたぞ」

アリス 「（小声で）今日は。お邪魔します」

警戒しながら、ゆっくりと中に入る一行

賢一 「お、動いた」

ドアノブを回し、ゆっくりと引っ張る。

賢一 「開くかな」

ドアノブに手をかけて、回してみる

賢一 「この中のようなだな」

アリス 「うん」

賢一 「この中を覗き込んで

薄汚れた窓のある錆びた扉がある。

2階入口前踊り場に立つ賢一とアリス。

○ 街外れの廃工場・建物2階入口（昼）

アリス 「

賢一 「びっくりしたあ。：ああ、ありがとう、

アリス 「ケン、気をつけて」

が、3mほど下の地面に落ちて行く

タイトル『今日は晴天なり』－シナリオ

賢一 「よし、行こう」

○ 街外れの廃工場・建物2階構内（昼）

賢一 「よし、行こう」

アリ ス 「あのドアから入れそうですね」

賢一 「この奥かな？」

○ 街外れの廃工場・建物2階（昼）

賢一 「これで下に降りられそうだな」

賢一 とアリスが中に入ってパネルを操作

するが、通電していないらしく、全く動

く気配がない

賢一 「これ、1階まで降りる。すぐ目の前

に、1階まで降りる。この出来る簡易エ

レベーターがある

渡り廊下を取り巻いている。すぐ目の前

の高さで、人が1人歩けるほどの鉄製の

1階まで吹き抜ける構内。詰め所の出口

街外れの廃工場・建物2階構内（昼）



アリス「ケン、大丈夫。ちよつと待ってね」

賢一「うわっ、真っ暗だな。明かりがあれば

○ 街外れの廃工場・地下通路（昼）

穴の上から微かに光が差し込むだけで、

ほぼ真っ暗の地下通路

アリス「ケン、気をつけて」

梯子を伝って中に入って行く一行

な？」

賢一「梯子がある。ここから中に入れるか

開放後、暗い内部を覗き込んで

鉄板の扉の取手を掴んで開く賢一。

\* \* \*

は取手らしいものが見える

の鉄板があり、一辺に蝶番が、反対側に

奥角近くの床面を指差す。1 m 四方程度

見回して「あ、多分あれですね」

アリス「ちよつと待ってください。（周りを



目  
の  
前  
の  
ラ  
ン  
タ  
ン  
が  
消  
滅  
す  
る

ないかなー

アリス「あ、明るくなかった。これ、もういら

通路に明かりが灯り、明るくなる

タッチレバーを上にする。すると

そう言い終わらぬうちにボックスのスイ

賢一「ちよ、ちよっと待った、アリス」

アリス「スイッチみたいだよ。入れてみるね」

賢一「あれっ、あれは何だ？」

アリス「アリス、側に近寄り

賢一「あれっ、あれは何だ？」

ている。それを見つけて

タッチらしき装置がついたボックスが付い

側で通路が終わっており、そこにはスイ

路が奥に続いている。降りてきた階段の

幅1m、高さ2mほどの直線状の地下通

賢一「へーっ、便利だな」

賢一「えへっ、雰囲気出るでしょ」

アリス「えへっ、雰囲気出るでしょ」

が浮かんでいる

周囲が明るくなる。目の前に、ランタン

賢一 「ふーっ。全く、何もなかったからよか  
ったものの、何かあったら大変だったじゃ  
ないか。無闇矢鱈とその辺にあるものに触  
るんじゃないよ、アリス」  
アリス 「ごめんなさい。でも、結果オーライ  
イだね」  
そう言っただけで笑うアリス。  
やれやれという仕草をする賢一。  
通路の奥を見つめて  
アリス 「あれ？ケン。奥に光るものがあるよ」  
賢一 「何だろう。行ってみよう」  
\* \* \*  
地下通路突き当たり。窓のない、金属製  
の手入れの行き届いた扉がある。扉には  
ノブなどの突起物は無い  
賢一 「行き止まりだな。：ドアのようだけど、  
この向こうには何があるんだろう」  
アリス 「ここから先は、例の地図にも載って  
ないよ」

○ 街ドーム・人用街区入口前（昼）

金属製巨大ドーム状の壁が一面に続き、  
 2m四方ほどの口が開いている。その外  
 は砂礫砂漠様の荒野が遙か彼方まで続い  
 ている。上空には雲と太陽が輝く。  
 その口から、恐る恐る出てくる賢一とア  
 賢一「うわっ、眩しい」  
 手をかざして、光を避ける賢一  
 アリス「あっ、ドア、動いてるよ、ケン」  
 扉の隙間から、強い光が差し込み始める  
 して開き始める  
 低いモーター音が聞こえ、扉がスライド  
 賢一「え、何だ？何だ今の音」  
 賢一、慌てて扉から手を離す  
 SE「カチッ」  
 賢一、何気なく扉に手を触れる  
 なんだ？  
 賢一「しかし、このドアは、どうやって開け  
 ノブのない扉を見回して

タイトル『本日は晴天なり』ーシナリオ

賢一 「何だお前、やるのか」

鳥天狗に視線を戻し、身構える賢一

アリス 「でも、いますよ。そこに」

賢一 「鳥天狗って。お前、そんなの、いる訳」

賢一 「思わずアリスを振り向いて」

鳥天狗さんに似てますね」

アリス 「(妙に冷静に) 昔話に出てくる、鳥天

賢一 「うわっ、何だ。何だお前」

賢一 「そう言って思わず後ずさる賢一

賢一 「している

した大男の姿になる。鳥天狗のような姿を

の丈2mほどの、有翼で大きな嘴を備え

目が明るさに慣れてくると、人影は、身

アリスの指差す先に、人影が見える。

アリス 「ケン、誰かいる？」

賢一 「ここは、：ここは一体何だ？：一体ど

外に出て、周りを見回しながら

通に映る)

リス(これ以降、賢一、アリス以外も普

烏天狗、その様子を眺めているが、しばらくして何か喋りだす。が、高音でキー言うだけで、何を言いたいのかさっぱり分からない。何かを伝えたそうので、敵意は感じない。

アリス「攻撃する気は無さそうに見えますね」

賢一「確かに。敵意はあまり感じないな」

両手を胸の前から下ろすが、依然、緊張状態を続ける賢一。

アリス「何かに気付いた様子で」

アリス「あ、そうか」

賢一「ん、どうした、アリス」

アリスも高音でキーキー言い出す。烏天狗と会話しているように見える。

賢一「アリス。お前、どうしたんだ？お前、奴の言葉が分かるのか？」

アリス「あ、ごめん、ケン。どうやらこの烏天狗さん、私たちに敵意はないみたい。私たちのお出迎えをしに来たみたいよ」

タイトル『今日は晴天なり』－シナリオ

晴天なり。聞こえますか」

鞍馬「あー、あー。今日は晴天なり。今日は  
低くなり男性のような声に落ち着く  
烏天狗、何かを喋りだす。段々と発声が  
賢「言語情報の交換？」

アリス「ケン、ええとね。烏天狗さんと、ケ  
ン」の言語情報を交換したの」

賢「アリス、手合わせを終え、賢一のもとに  
戻ってくる

アリス「アリス：お前、何やってんだ？」

烏天狗に歩み寄り、お互いに右手の手の  
ひらを向かい合わせて近づける。手のひ  
らの間が淡く光る

アリス「あ、ケン、ちょっと待ってね」

賢「自分でも分からないのか：」

アリス「何で分かるのか、アリスにも分かん  
ない。でも、なぜ分かるの」

賢「お出迎えて。：それよりアリス、何  
であいつの言葉が分かるんだ？」

タイトル『今日は晴天なり』－シナリオ

賢一 「はあ？ 本日は晴天なり？」  
鞍馬 「えっ、君たちの習慣では、発声の調整  
のときには、この台詞を使うんだろう？」  
賢一 「いや、それはマイクの調整じゃ？」  
鞍馬 「えっ、違うのか？ まあいい。ええと  
確か：仲間賢一、仲間賢一君だね」  
賢一 「えっ、はい。そうですけど」  
鞍馬 「君を迎えに来た。私は：ええと：。鳥  
天狗では、ないぞ。君たちはそう呼んでい  
るようだ。」  
賢一 「はあ」  
鞍馬 「そうだな。私の名前は君たちの言葉で  
は正確には発音できないんだが：。うん、  
とりあえず、鞍馬、って呼んでくれていい」  
賢一 「呼んでくれていいって、：鞍馬：さん、  
ですか」  
鞍馬 「そうだ、鞍馬だ。どうやら君たちの歴  
史上での有名な人らしいからな」  
賢一 「鞍馬って、：鞍馬天狗かよ」  
鞍馬 「はっはっは。なかなか良いだろ」

賢一「乾いた笑い声で」はははは

アリス「ケンちゃん」

賢一「で、その鞍馬さんが僕を迎えに？ 何故？」

鞍馬「うん、そのことなんだが。：まあ、とりあえずついて来てくれ。あの方、あの方か。元のにお連れしよう。詳しくは、あの方か。聞いてくれ」

賢一「あの方？ あの方とは？」

鞍馬「いやあ、まあ、なんと云うか。君たちの言葉でなんとお呼びしたらよいか分からんので、：あの方なんだ。とにかく、君の身柄を引き受け、保証し、責任を持ってくれる、ありがたい偉いお方なんだ」

賢一「なんだかよく分からないけど、いつまでもここにいても仕方ないし、まあ悪い人では無さそうだし。その、あの方という人

アリス「心配そうに」ケンちゃん、アリスは？」



鞍馬「もちろん、そちらさん、アリスさんか。  
 あなとも一緒に来てください。いや、むしろ来てもらわないと困る」  
 賢「アリス、一緒に行こう」  
 アリス「うん」  
 賢「これで決まりか。で、鞍馬さん。ここからどうやって、どこに行くんですか？ 見たところ、周りには今出て来たこの壁以外は、何も見えないようです。車とかの移動手段も見当たらないし」  
 鞍馬「大丈夫だ。君は飛翔は出来ないようだから、移動手段は用意している。まずはここから出よう」  
 賢「ここから出るって、どうやって？」  
 鞍馬「鞍馬、立ち位置から壁の反対側に向かって歩き出す。賢一もそれに続く。10mほどして止まる。何も無いように見える空間に手をかざすと、突然空間が開き始める」

賢一「（驚いて）な、何も無いところが開いていく」

鞍馬「さあ、賢一君。ついて来たまえ」

入っっていく。慌ててそれに続く賢一達

○ 養育環境ドーム・人用入口前（昼）

上部に街並みが望める先程の街ドーム、それを取り巻く砂礫砂漠を、その外側にある透明な半球状のドームが覆う。出て来た入口前は舗装された50mほど直線の道が続いていて、その先には、ドーム内とは異なる構造の街が広がっている。道の両脇は芝生になっている

賢一「（驚愕して）な、何だこれは」

アリス「わーお、すごい」

鞍馬「はっはっは。驚いたかい。ここが我々の、そしてこれから君達が住む街だ。君達は、あのドームの中で生活していた訳だ」

そう言っつて、ドームの方向を指す

賢一 「その方向を見て  
鞍馬 「まあまあ。とりあえずこれに乗っても  
らおう」  
鞍馬 「手を挙げて合図する。  
馬なしのオープン馬車が浮上して、接近  
してくる  
賢一 「な、馬車が飛んでくる??」  
賢一 達の目の前にオープン馬車が飛んで  
来て着地する  
鞍馬 「馬車のドアを開けて  
鞍馬 「さあ、賢一君、アリス君。乗ってくれ  
たまえ」  
恐る恐る、馬車に乗り込む賢一達  
最後に鞍馬も乗り込んでドアを閉める  
鞍馬 「では、出発」  
馬車が音も無く浮上し、飛び始める  
○ 葛葉の客間（昼）  
品の良い床の間付きの畳敷きの部屋。奥

賢一 「私たちが、ですか？ 僕の目には、あなた  
は大変不便ですから」  
は、言語の体系が異なります。そのままでは  
葛葉 「ごめんなさいね。私たちとあなた方で  
賢一 「またですか？」  
この名前を使っておりませう」  
あります。あなたが発音できるように、  
葛葉 「はい。もともと、これは私の本名では  
賢一 「くずは、さんですか？」  
葉と申します」  
したね。よくいらっしやいました。私は葛  
葛葉 「仲間賢一さんと、確か、アリスさんで  
賢一 「はい。もともと、これは私の本名では  
賢一 「くずは、さんですか？」  
葉と申します」  
したね。よくいらっしやいました。私は葛  
賢一 「私たちが、ですか？ 僕の目には、あなた  
は大変不便ですから」  
は、言語の体系が異なります。そのままでは  
葛葉 「ごめんなさいね。私たちとあなた方で  
賢一 「またですか？」  
この名前を使っておりませう」  
あります。あなたが発音できるように、  
葛葉 「はい。もともと、これは私の本名では  
賢一 「くずは、さんですか？」  
葉と申します」  
したね。よくいらっしやいました。私は葛

賢一「（驚愕して）ち、地球じゃない？地球じ  
の惑星なのです」  
速さでおよそ56億7千万年分離れた、別  
でもありません。あなた方の地球から光の  
そこどころか、あなた方の母星である地球  
さい。まず、ここは日本ではありません。葛葉「分  
さい」  
賢一「分からない事です。説明して下さい  
葛葉「混乱するの仕方のない事です。それ  
こなんですか？変なものばかりあって」  
体誰なんですか？それに、ここは一体、ど  
賢一「本当の姿ではないって。：あなたは一  
しれません」  
本当の姿と言っても間違いではないのかも  
葛葉「これは私の本当の姿ではありませ  
もつとも、この姿も長いので、はや私の  
は普通の人間に見えますが」

賢 一 「時は3ヶ月もあれば行くことが出来る」  
世界だ。そんなこと信じられるか」  
移動する時間はかかるが、それでも地球まで  
んなに掛からない。最寄りの時空の穴まで  
が、時空の穴や、亜光速航法を使えば、そ  
鞍馬「確かに、光でも何十億年掛かる距離だ  
だ」  
賢 一 「そんな事は無いって、どういう事なん  
鞍馬「そんな事は無い」  
やないか！」  
「僕がこんな所にいられるはずがないじ  
億年もかかるんだろ。そんなに離れていた  
賢 一 「当たり前だろ。大体、光の速さで何十  
じられる訳、ありませんよ」  
葛葉「そうですね。こんな話、すぐには信  
な話、信じられる訳ないじゃないですか！」  
億光年離れた別の惑星だって！そんな馬鹿  
やないって！そんな馬鹿な！それも五十何

葛葉 「私たちには、調査などの名目で、時々、  
 賢一 「どういうこと、なんですか？」  
 もあるのですよ」  
 葛葉 の方に向き直して  
 私も、妖怪に見えるのでしようね。そう言  
 うよりも、妖怪だろ、どう見ても」  
 賢一 「う。：でも、お前の姿は、宇宙人とい  
 んなことを言うのか」  
 鞍馬 「はっはっは。私の姿を見てもなお、そ  
 賢一 「じゃあ、何かい。お前達は宇宙人、と  
 だから仕方がない」  
 鞍馬 「まあ、信じるも信じないも、事実なん  
 も、かつてあなたの住んでいた、日本にも  
 妖怪などと呼ばれていました。かくいう私  
 てその時にあなた達にたまたま見られた時、  
 あなた方の地球を訪れていたのです。そし

葛葉 「はい。残念ながら、その影響で、ほと  
賢一 「地球が：小惑星群が襲った？」  
惑星にお連れしたのです」  
方の一部をサンプルとして採取して、この  
した我々は、種の保存の観点から、あなた  
小惑星群が襲いました。それを事前に察知  
からおよそ10年前。あなた方の地球を、今  
葛葉 「はい。落ち着いて聞いてください。今  
んだ。おかしいじゃないか」  
めたとして、じゃあ、なぜ僕はここにいる  
賢一 「なるほど。：そうだ。もし、それを認  
方の言葉も覚えたのです」  
葛葉 「はい。その時に、今使っているあなた  
賢一 「日本に？」  
前なのです」  
の時の姿や名前が、この姿や葛葉という名  
暫く住んでいたことがあったのですよ。そ



賢一「(立ち上がった) そんな馬鹿な。こんな事、信じられる訳ないだろう。うわーっ」

葛葉「あな、あなたはこの世界のことを色々学ばねばなりません。この惑星ネヴァン、あなた方の言葉でニルバーナのことを」

アリス「そうか。だからアリスは鞍馬の言葉が分かったんだね」

葛葉「そうですね。アリス、あなたを直接理解できる存在は、むしろ稀なので。賢一、あなたが、私たちの翻訳機を使いこなす能力を持つまで、アリス、あなたはその役目を果たさねばなりません」

アリス「え、あたし？」

葛葉「そうですね。私のようにあなた方の言葉です」

賢一「(落胆して) 地球が：滅んだ：」

葛葉「あなたは、元の世界に模したドーム内で、このことが理解できる年齢になるまで育てられました。この惑星、この世界で生きていくために。そしてアリスを与えたのです」

賢一 「おばさん、信じられますか、こんな」

婦人 (声) 「こんにちは、いいお天気ですね」

賢一 「そんな馬鹿な。そんな馬鹿な」

アリス 「ケン、ちよつと待ってよ」

賢一 「息を切らして走ってくる賢一。それを追うアリス」

○ 賢一の自宅・玄関前 (夕)

葛葉 (声) 「良いのです。気の済むようにさせてあげましょう」

何もありませんよ」

鞍馬 (声) 「いまさらあそこに行ったらって、人ごみの中を走り抜ける賢一達

見ると賢一以外の人は、ロボットだった。いつもと変わらず人ごみが多い街。よく

○ ドーム内電気街 (夕)

アリス 「ケン、待って！」

追って出て行くアリス

そう言って飛び出していく賢一。それを

賢一（声）「いつか地球に戻ってやるーっ。

地球に戻って、どうなったか、確かめてやるんだーっ！」

【終わり】

振り向くと隣家に婦人のロボットがマネキンのように立っている

婦人「こんにちは、いいお天気ですね」

賢一「（驚いて）おばさん？」

賢一「頭を抱えて叫ぶ

賢一「うわーっ！」

カメラ、どんどん引いていく。賢一の自宅、街、ドーム、惑星の街、軌道エレベーター、その上部の宇宙ステーションと行き交う宇宙船群、惑星遠景、恒星系、銀河、銀河団。別の銀河団に移って今度は寄っていく。星のような銀河団、銀河、太陽系、地球の遠景まで。